

# 琉球大学学術リポジトリ

「世界のウチナーンチュ大会」と沖縄県系人ネットワーク（5） — 新たな社会空間の形成と紐帯をめぐって —

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学移民研究センター 公開日: 2018-11-13 キーワード (Ja): ウチナーンチュ, ネットワーク, ウチナーグチ, 紐帯, 民族 キーワード (En): 作成者: 金城, 宏幸, Kinjyo, Hiroyuki メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.24564/0002010135">https://doi.org/10.24564/0002010135</a>

## 「世界のウチナーンチュ大会」と沖縄県系人ネットワーク (5) －新たな社会空間の形成と紐帯をめぐって－

金城宏幸

- I. はじめに
- II. ウチナーンチュという「民族性」
- III. 「世界のウチナーンチュ大会」の諸相
- IV. ネットワークの紐帯としての言語
- V. おわりに

**キーワード：**ウチナーンチュ，ネットワーク，ウチナーグチ，紐帯，民族

### I. はじめに

明治政府が琉球処分を実施してから約130年が経過する2008年10月30日、国連の人権委員会は、沖縄・琉球人がアイヌ民族同様、日本の先住民族であることを公式に認め、日本政府にその言語や文化遺産などの保護促進を講じるよう勧告を行った。国連におけるこうした議決を踏まえ、沖縄選出の喜納昌吉国会議員は日本政府の姿勢を問うが、政府は『琉球民族』の意味するところが必ずしも明らかでない」との認識を示したうえで「沖縄振興計画に基づき、沖縄で伝承されてきた文化的所産の保存や活用、地域の文化振興に取り組んでいる」との答弁書を閣議決定した。さらに、政府が設置した「アイヌ政策のあり方に関する有識者懇談会」と同様な組織を「琉球民族」についても設置する考えはないか、との質問には「考えていない」とした。

国連人権委員会の決議は、2000年から委員会の中にある先住民族作業部会に沖縄の有志が代表団を送り続けたことの成果なのだが、この件に関して県内マスコミ各社が大きく取り扱うことはなく、広く人々の衆目を集めた様子は見られなかった。このことは、現在「ウチナーンチュ」を自認する人々の間で「民族」という自覚が薄れているか、少なくともそう表現することにためらいや抵抗があることを示しているものと思われるが、確かに、最近では沖縄の人々を指すことばとして「琉球民族」という言い方はあまりしなくなり、特別な場合を除いて、文字通り単に沖縄の人という意味で「ウチナーンチュ」という沖縄語が使われる。もちろん、「ウチナーンチュ」ということばも、もともと「ヤマトンチュ（大和人、日本人）」のカウンターイメージとしての意味を持って使われてきたのであり、このことばが使用される限りそうした自己像を内部に持ち続けるのだろうが、現代では「民族」というほど明確な意識を持って使う者は少ないのではないだろうか。スチュアートヘンリが『民族幻想論』の中で述べているように、民族は「その時々状況に即して創

られ、再生産される、操作可能な社会観念」(ヘンリ 2002, 18)であり、時代や社会状況とともに変化する現象のようなものであるとすれば、「琉球民族」が自明であった時代から社会の構成員が少しずつだが着実に入れ替わっていくなかで、そのことばの持つ概念に対して違和感を持つようになったということではないだろうか。しかしながら、このことは、沖縄の人々が自己の文化や伝統に特異性を認めなくなったということではなく、日本という版図に包摂されていく過程でその境界を見失いそうになりながらも、今度はグローバル化の進展と世界的な文化認識の潮流に刺激を受け、新たな地平を開こうとしていることも事実である。実は、そうした模索の中で生じてきたのが「世界のウチナーンチュ」という言説であり、具体的な目標として掲げられるのが世界に散在するコミュニティの間で互いに連帯する「ネットワーク化」という活動である。

本稿では、このように国境を越えて模索されるウチナーンチュのネットワーク化という動きに注目し、その様態の把握を試みるが、筆者を含む研究チームによって実施された「アンケート調査」(後述)の結果分析を中心に、文献や聞き取り調査で得られた知見を加味しながら、特にその越境的なアイデンティティの基となる「紐帯」の所在、及びその行方について論考を試みる。

## II. ウチナーンチュという「民族性」

特異な文化を持つと自他ともに認めるウチナーンチュは、国内のみならず海外においてもコミュニティを形成し、今やその団結力で国境を越えたネットワークを形成しつつあるとの言説が説得力を持つようになり、越境的なエスニック集団としてのイメージが表出しつつあるといえる。こうしたことは、沖縄県の主導で行われる国際的な一大イベント「世界のウチナーンチュ大会」<sup>1)</sup>が回を重ねるごとに拡大することで実体化され、2000年のハワイでの沖縄移民百周年祭を皮切りに、2006年にはペルーで、そして2008年にはブラジル及びアルゼンチンでの沖縄移民百周年記念行事が現地で盛大に開催されたことで確認され、一つの盛り上がりを見せた。歴史のなかで、対ヤマトンチュとの軋轢や被差別意識の中で鍛え上げられ、時にコンプレックスを伴いながら実体化されてきたウチナーンチュのアイデンティティは、1972年の本土復帰を境に大きく変化し始め、20世紀も後半になると、世界各地に雄飛したウチナーンチュの「国際性」というイメージを取り込み、グローバルに開かれた夢やロマンを含んだアイデンティティを意識するようになったのである。

第4回世界のウチナーンチュ大会に、世界21カ国から4,937人という驚異的な数の参加者があったように、ウチナーンチュに集団としての志向や行動があるのなら、そこには文化人類学や社会学でいうところのアイデンティティ、すなわち集団の帰属意識が存在するということであり、集団のアイデンティティが介在するということは確かに「民族的」

な集団であるといえるだろう。最近では、ウチナーンチュが自らを「民族」とであると表明もしくは強く意識することは少なくなったかもしれないが、規模が異なるとはいえ、その行動様式は中国人やユダヤ人のように国境を越えてネットワークを形成する人々にも似ている。民族というものが可変性を宿命とし、ヘンリが言うように、「民族はあると思えばあり、ないと思えばない、つまり、鶴のようなもの」(ヘンリ 2002, 25) だとしても、現在、集団として越境的なネットワークを志向する動きが確認されるのであれば、その領域内で生活する人たちにとっては、民族的な意味での「ウチナーンチュ」は存在するといえるだろう。

ところで、ウチナーンチュの心理に、自分たちが一つの「民族」とあるとの意識が深く刻まれたのは、おそらく明治政府による同化政策を通じた皇国民化教育が行われた時代であろう。第二次世界大戦後の異民族支配から脱却して「祖国復帰」への運動を展開した時代にも民族としての一体感が高揚されたはずである。そういう時代におけるウチナーンチュ・アイデンティティとは、「ウチナーンチュ」対「ヤマトウンチュ」という二項対立のなかで、より自己防衛的な意味での民族意識のなかで形成されてきたのであったが、そうした部分を引き継ぎながらも、社会環境の変化とともにアイデンティティを再編成し、海の彼方へもネットワークを拡大しながらグローバルなアイデンティティを模索しようとしているのが、21世紀の「世界のウチナーンチュ」が目指しているものである。

### Ⅲ. 「世界のウチナーンチュ大会」の諸相

筆者を含む琉球大学法文学部の教員<sup>3</sup> 3名は、このように沖縄系コミュニティの間で近年見られるようになった越境的なネットワーク化の動きに着目し、その様態を把握すべく、2006年10月に「第4回世界のウチナーンチュ大会」が開催されたのを好機と捉えて、世界各地から参集したウチナーンチュに対する「アンケート調査」を大会実行委員会(沖縄県)との共催で実施した。こうした類の定量的調査はおそらく初の試みであったが、現在ウチナーンチュと称される人々の多文化的・多言語的な状況を考慮し、調査票を4言語(日本語・英語・ポルトガル語・スペイン語)で作成して約5,000名の参加者に同時配布し、ウチナーンチュ大会への評価や県系人の越境的なネットワーク活動などに関して調査した。最終的に794票が回収された。

第4回世界のウチナーンチュ大会の目的は、「移住者世代の功績を踏まえ、ウチナーネットワークを担う次世代の育成を図る大会とし、世界に広がるウチナーネットワークの継承さらには深化・拡充を目指す」(琉球新報社 2007, 53)とされたが、そこで見えてきたウチナーンチュ・ネットワークの実態とはどのようなものであろうか。以下にその集計結果を分析しながら論考する。

### 1) ネットワーク活性効果としての「ウチナンチュ大会」

このすぐれて沖縄的な「世界のウチナンチュ大会」は回を重ねるごとにその内容も充実し、第4回大会には過去最大の参加者数を数えた<sup>2)</sup>が、沖縄からの出移民現象が途絶え、海外のコミュニティとの間で親族関係が希薄になっていく中で、ルーツを共有するという意識を再想起させ、国境を越えた絆を強化しつつ、ウチナンチュとしてのアイデンティティを醸成するインキュベーター (incubator) のような役割を果たしているといえるのではないだろうか。このことは、今回のアンケート調査における参加者の回答に垣間見ることができる。設問15で「大会」の成果を問われたウチナンチュたちは、第一に、沖縄の伝統・文化・風土への理解が深まったことを挙げ(74.2%)、次に自分が沖縄系であることを認識した(72.8%)と回答している(図1)。4回大会において、すでに参加者の大多数が沖縄県の出身ではないことを考慮すると、海外に生まれた二世や三世たち(参加者全体の73.7%)は、両親や祖父母の故郷を訪れることで、自身のルーツを体感し、アイデンティティを確認する。そして、その土地の人々や風土に触れることで、何故に自分がウチナンチュであったかという長年の自問自答に、回答が得られたような気がしたということではないだろうか。アンケートの自由記述にも、「感動した」とか「誇りに思う」というような内容のことが数多く記入されている。

興味深いのは、この大会が、ウチナンチュの血縁者のみならず、それ以外の人々(配偶者や友人たちであろうか)をも巻き込んで沖縄ファンを生み出している様子が見え

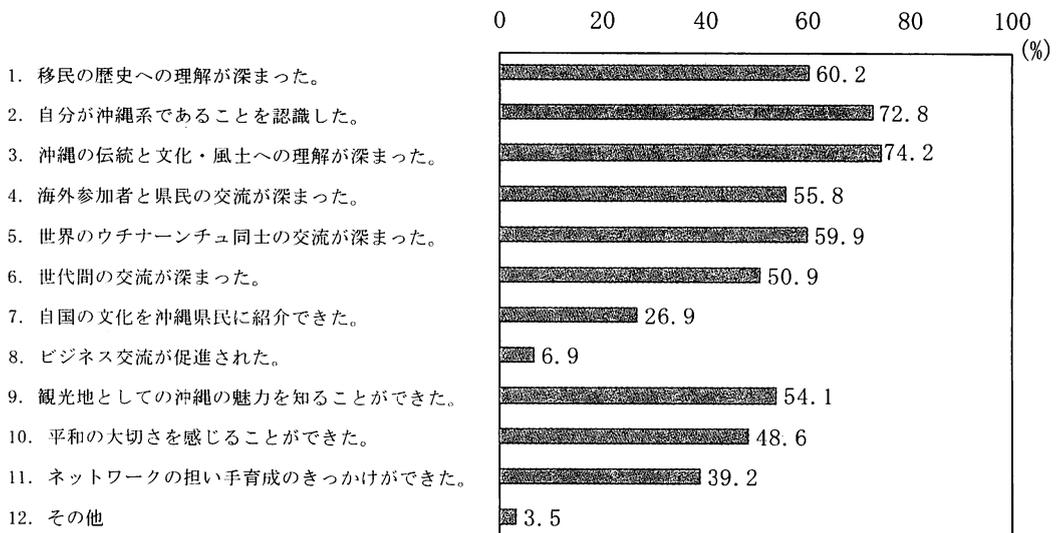


図1 沖縄系であると答えた人の「大会」の成果

資料：第4回世界のウチナンチュ大会実行委員会資料より作成。

ることである。設問 2 の沖縄系であるかどうかの質問に対して、約 17%の回答者がそうではないと答えている。このことは、希望的な観測でいえば、ウチナーンチュの文化が「他者」をも巻き込んでネットワークを形成しつつある証左とも読み取れ、実際、こうした傾向を歓迎する県人会<sup>3)</sup>の存在もその背景にあるのだろう。

## 2) アイデンティティ維持装置としての「県人会」

ところで、ウチナーンチュが移民した日本国内や海外各地に存在し続ける「県人会」や「クラブ」などは、その地域における沖縄文化とアイデンティティの「維持装置」あるいは「発信地」として機能しているとは言うまでもない。たとえば、4 回大会の参加者における県人会への所属率を見てみると、沖縄系では、やはり県人会に所属する人の参加率は 81%と高く、県人会に所属することで「大会」の情報を得ながら参加意欲を喚起されているということを示すものであろう。さらに、今後県系人との交流予定があるかどうかという問いに対しては、県人会に所属する県系人の方が所属しない人に比べて明らかに高い(52.7%対 43.8%) ことなどから、県人会へ参加することで沖縄文化に興味を持つ、あるいは沖縄文化に興味があるから県人会に参加するという相乗作用が機能していることが想像される。そういった意味でひとつ気になるのは、県人会への所属率が世代を経るにつれて低下する傾向があるように所見されることだ(図 2)。なぜならば、県人会活動への参加の機会が少なくなれば、こうした相乗機能が働かなくなるからだ。

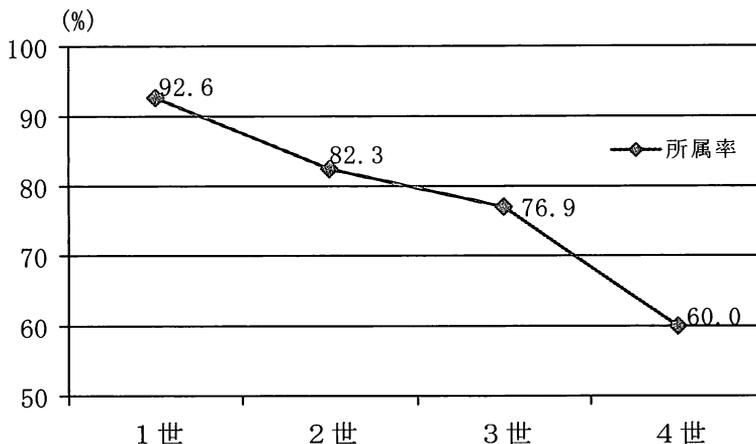


図 2 「大会」参加者の県人会への所属率

資料：第 4 回世界のウチナーンチュ大会実行委員会資料より作成。

#### IV. ネットワークの紐帯としての言語

さて、この論考の冒頭で、筆者はウチナーンチュの「民族性」について触れたが、ここで民族あるいはエスニック集団の越境的なネットワークの形成における紐帯としての「言語」の役割について述べてみたい。

社会言語学者の田中克彦は、「民族という規定しにくい複雑な性格を持つ人間集団を、言語によって定義する方法は、マルクス主義の民族理解を含む、あらゆる科学的思考に共通である」（田中 1997, 13）とし、ソシュールが『一般言語学講義』のなかで述べた「民族を作るのは大体において言語である」という考えを支持する立場から、「一まとまりの言語共同体があるから一つの単位をなす固有語が話されており、固有語があるから、その固有語を共有する一まとまりの言語共同体が成り立っている」（田中 1997, 26）として、人間集団を規定する言語の役割について明快な論考を展開している。

ウチナーンチュがウチナーンチュたる所以は、当然なことながらその文化にある。その沖縄の文化は、時代と共に変容を余儀なくされるものでもあるが、世代間でどのように継承されるかは、すなわち今後のウチナーンチュ・コミュニティのあり方を決定付けるものである。「第4回世界のウチナーンチュ大会」では、世界に広がる県系人ネットワークの文化的中核は「チムグクル（思いやりの心）」であり、それが県系人ネットワークの求心力であると繰り返され、多くの参加者によって賛同を得たように見える。

沖縄の文化は、「チムグクル」や「ユイマール（助け合い）」という精神風土の周辺に、その芸術的表現手段としての伝統芸能などが合わさって表象される。そして、こうしたキーワードの表現方法にも象徴されるように、沖縄の文化を伝える重要な要素がウチナーグチ（沖縄語、琉球語）であると考えられるウチナーンチュは今でも少なくない。こうした想いは、ウチナーグチが話せなくなった海外のコミュニティに暮らすウチナーンチュたちにも共有されているようだ。例えば、社会学者の白水繁彦は、ハワイ・オキナワ連合会の会長がわざわざウチナーグチを年間の活動方針にする背景を次のように報告している。

主流社会の文化圧力の中では、こうして、絶えず出自文化との間でフィードバックが必要なのだ。（略）出自文化に立ち返って気を引き締める必要がある。アイデンティティということには独自性という意味もあるが、オキナワが独自性を主張するためには、主流社会の言語である英語でもいけないし、まして、日本における主流社会の言語であるヤマトグチでもいけない。どうしてもウチナーグチで善なる概念を打ち出さなければならない（白水 2004, 38）。

現代の沖縄島ではどうかというと、琉球新報社が2001年に実施した県民意識調査によると、県民の91%が沖縄文化を誇りに思い、同時に89%が方言への愛着を持っているこ

とが判明している。実際に方言を使いこなせるのが 56%に満たなくなっただにもかかわらず、愛着は極めて強いのである。文化に誇りを持ち続けていて、方言はあまり使えなくなっても強い愛着を感じているというのは、沖縄の場合、特に伝統芸能などが広く愛好されており、それが方言に密着していることも一つの重要な背景としてあると思われる。

この頃は、海外の若いウチナーンチュたちの間でも、沖縄文化の実践としての太鼓やエイサーなどが人気を集めているが、芸能家の勝連繁雄は、沖縄の方言と芸能・文化の関係をこう述べる。

特に沖縄の芸能・文化の場合、方言文化といっても過言でないほど、方言との結び付きが密接である。三線音楽の歌詞も、舞踊曲の歌詞も、組み踊りのセリフもすべて方言であり、方言を基本にした言い回しである。方言を解しないでは、どうしようもないものばかりである (勝連 2000, 150)。

このように文化と言語の関連性から考察すると、はたしてウチナーンチュのネットワークにも紐帯としての言語が存在するのかという疑問がわいてくる。アンケート調査では、ウチナーグチがすでに紐帯ではなくなっているとの判断から、日本語能力について質問したが、世代が進むにつれて急速に共通の言語を失いつつあることがわかる。(図 3) また、日本語能力が高いほど他のウチナーンチュとの交流の予定があることも判明している。

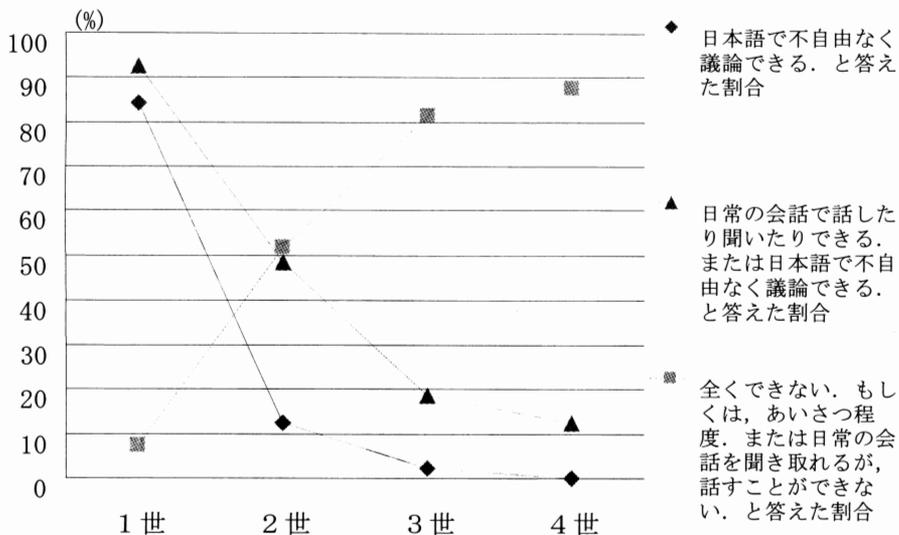


図3 「大会」参加者の世代別日本語運用能力

資料：第4回世界のウチナーンチュ大会実行委員会資料より作成。

筆者は、ウチナンチュが自らのことを「琉球民族」と呼ばなくなったのも、この言語すなわちウチナーグチの喪失過程と並行していると考えている。もちろん、「琉球民族」ということばを復活させるべきだと主張しているのではないが、少なくともウチナーグチが多くウチナンチュに常用されていた時代は過去のものとなりつつあり、「民族的」な集団に固有で共通の言語を失いつつあることは事実として受け止めなければならないと考える。

## V. おわりに

多文化的で多言語的になったウチナンチュを一つの「民族的」な集団として位置づけるか否かは別にして、紐帯の最も有効な要素である言語を失いつつある今、新たな沖縄社会の創造のためには、新しいネットワークの在り方と新たな紐帯を模索しなければならない。そうでなければ、共通の言語を失ったという喪失感だけが残り、紐帯不在のまま各々のコミュニティの営みに戻り、越境的ネットワークという夢がついに実践化されることなく、そう遠くない将来にネットワークへの意欲が沈滞化する危惧を、筆者は否定しない。

幸いなことに、第4回世界のウチナンチュ大会の参加者を見る限り、世代を経るとともに、むしろ今後の交流意欲が高くなっているし(図4)、年齢別に見ても比較的若い人々の間に交流の予定が多いことが判明している。

民族も文化も、そもそも虚構の物語をつくりあげていく作業だとすれば、紐帯を求め続けるという営為のなかにこそ紐帯があるのではなかろうか。

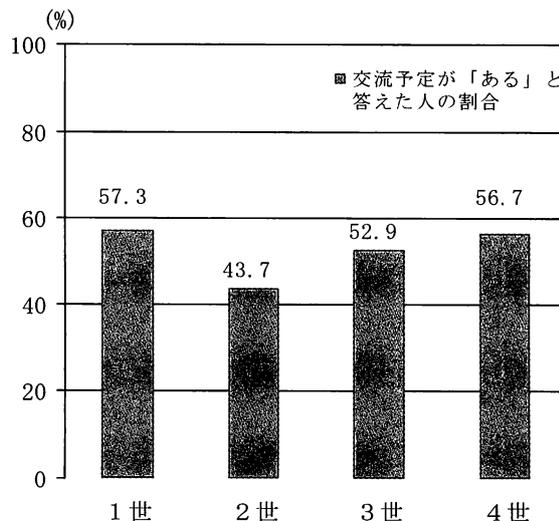


図4 「大会」参加者の世代別・今後の交流予定

資料：第4回世界のウチナンチュ大会実行委員会資料より作成。

## 注

- 1) 1980年代に、沖縄のメディアによる「世界のウチナーンチュ」を意欲的に取り上げる試みなどを背景に、県民と世界に散在するウチナーンチュたちが連帯感を再認識し、国境を越えて共鳴し合うようになる。こうした「世界のウチナーンチュ」意識が盛り上がりを見せるなか、復帰後20周年という節目を数年後に控えて、沖縄県のあらたな振興策を模索し続ける県政の施策の延長線上に、移民一世の故郷への想いと二世・三世などのルーツ探しを熱望する声、そして沖縄県民の誇りと希望を将来に見出したいというベクトルが交差する形で、1990年(平成2)、記念すべき「第1回世界のウチナーンチュ大会」がその開催をみる。その後、第2回(1995年)、第3回(2001年)、第4回(2006年)と5年毎の開催を果たし、ウチナーンチュの越境的な連帯を強化しつつ、表に見られるようにその参加者も増加し続けている。この極めて沖縄的で画期的な一大行事は、一方で、財政的な負担が大き過ぎるとして、第3回大会ではその継続を危惧する声もあった。しかし、第4回大会の盛況にその意義を再確認した稲嶺知事(当時)は、グランドフィナーレに際して、継続開催への熱い意欲を明言し、同大会の実績を評価する現県政も、すでに第5回大会に向けた実行委員会の準備を始動させている。
- 2) 世界のウチナーンチュ大会参加者の推移については、金城宏幸「世界ウチナーンチュ大会」と沖縄県系人ネットワーク(1)—沖縄社会へのインパクト、『移民研究』第4号(2008) p87を参照。
- 3) 例えばハワイ県人連合会では、遺伝的なウチナーンチュではなくても、会の趣旨に賛同して共に活動したいという人々を Uchinanchu at heart として歓迎している。

## 文献

- 勝連繁雄, 2000, 『南島の魂—私の沖縄文化論』, ゆい出版.
- 金城宏幸, 2008, 「世界ウチナーンチュ大会」と沖縄県系人ネットワーク(1)—沖縄社会へのインパクト, 『移民研究』(琉球大学移民研究センター) 第4号 83-96.
- 小坂井敏晶, 2002, 『民族という虚構』, 東京大学出版会.
- 白水繁彦, 2004, 「エスニック文化とアイデンティティの世代間継承—ハワイ沖縄系コミュニティにおける事例研究—」, 『移民研究年報』第10号, 日本移民学会.
- 第4回世界のウチナーンチュ大会実行委員会, 2007, 『第4回世界のウチナーンチュ大会報告書』.
- 田中克彦, 1997, 『ことばと国家』, 岩波書店.
- ヘンリ, スチュアート, 2002, 『民族幻想論』, 解放出版社.

## The Worldwide Uchinanchu Festival and Okinawan Network (5): Seeking for the global cultural bonds

Hiroyuki KINJYO  
University of the Ryukyus

**Key Words:** uchinanchu, network, Okinawan language, ethnicity, cultural bonds

It can be stated that, in the 20<sup>th</sup> Century of Okinawa, the overseas emigration was a social phenomenon. Many Okinawan have emigrated and settled in many different places of the world, having built *Uchinanchu's* communities internationally.

One of the major factors for this emigration was the economic situation at that time. For Okinawa Prefecture whose industrial foundation was weak, emigration was the solution to the overpopulation, and the money remittance from people living abroad was very important, becoming vital to support its economy.

However, these emigration events which played an important role in the history of Okinawa suffered changes in the second half of the 20<sup>th</sup> Century. While the *Uchinanchu* communities overseas emerge, the fever of this “social phenomenon” in Okinawa started to lose its momentum, the word “emigration” began to fade away from the people’s daily life. On the other hand, the Okinawans living abroad continued their lives centered on the *Uchinanchu* communities, having “Okinawa” present in their daily life.

This situation continued for a while, and during the 80s the relationship between “Okinawa, the Emigrant Prefecture” and the overseas “*Uchinanchu* Communities” began to assume a new aspect. The Okinawan media started to cover “*Uchinanchu* in the world” eagerly, creating a great stimulus and bringing back the attention to the *Uchinanchu* who were living abroad. Under these circumstances, finally in 1990, “The First Worldwide *Uchinanchu* Festival” was realized. It was a grand project, in which *Uchinanchu* living in different parts of the world would gather at the place of their common roots. After this, the second (1995), the third (2001), and the fourth (2006) festival were held, strengthening the *Uchinanchu's* global network and having the number of participants increased from festival to festival. At the “festival” the participants become stimulated by rediscovering their *Uchinanchu* identities, which impulse the desire for a global network and this expanding and deepening network demands another “festival”, starting them to go in cycles.

In this paper, the author mainly discuss the global cultural bonds among the Okinawans and their communities which are in many different places of the world.